

学会報告

TEA研究会報告

伊藤 順一

TEA とは Theoretical Economics and Agriculture の略称である（一説には and ではなく on）。お茶（TEA）の会というのは、本研究会ですでに陳腐化したジョークだが、近代経済学をベースとする研究者の集まり、というのが TEA 会の実質的な意味であると思われる。小宮隆太郎教授の著書『日本の産業・貿易の経済分析』のまえがきによれば、“近代経済学”という言葉もだんだんと死語になりつつあるそうだが、幸か不幸か、日本農業経済学会では、必ずしもそうではない。Theoretical を標榜する意義は少なくない。

農業経済学会傘下には、立派な会誌を発行している学会がいくつかあるが、TEA 会にはそうした出版物がほとんどない。したがって、厳密に言えば、TEA 会は学会ではなく研究会である。40 分間の報告の後、20 分間の質疑応答を終えても、活字として残るわけではなく、業績としてカウントされない場合さえある。加えて、インフォーマルな研究会ほど、フロアからの意見は辛辣である。今年の TEA 会で研究報告を行った T 会員が、懇親会の席で、「自分は若いとき TEA 会で報告し、こてんぱんに批判され、二度と報告すまいと決心した」と話されていたが、報告経験のある多くの会員が、似たような感情を TEA 会に対して抱いているはずである。もちろん、T 会員に限らず、アンビバレントであるからこそ、懲りずに報告することができるのだと思う。

小生が TEA 会で初めて報告したのは、1987 年九州大学での春季大会である。当時幹事の原洋之介教授から研究室に電話があり、「お茶の会」だから気楽に報告してくれ、という要請に気軽に応じてしまった。TEA 会への

最初の参加が、初めての報告という「名誉」に与ったわけだが、結果は散々であった。京都大学の中嶋千尋教授の予想外の質問に立ち往生していると、筑波大学の黒田誼教授が見かねて答える、という醜態を演じてしまったのである。中嶋先生のご質問は、農家モデルの「分離特性」、つまり農家の生産（私の報告では投資）に関する意思決定が消費の選択から、分離可能である理由を述べよ、という内容であった。私は迂闊にも、中嶋教授の「農家主体均衡論」の核心部分に関する一片の知識も持たず、TEA 会で報告していたのである。数年後、京都大学で開催された秋季大会でも、中嶋教授からの質問に対し、再度フロアから助け船が出る、という有様だった。

というわけで、私の TEA 報告は苦難の連続であったし、不勉強を恥じる機会でもあった。しかし、研究を続けていると、研究会での質問と同じ問題に会い、指摘された事項の重要性に気づくことがある。これが研究の妙味であると思うと、意外に立ち直りも早く、また報告する意欲がわいてくる。

本年の春季大会では、以下の報告があった。ベトナムの米生産・流通に関する研究（九大、Nguyen Thi Minh Hien 氏）、空間均衡モデルを用いた備蓄制度に関する研究（九大、川口雅正氏）、中国雲南省の耕区制に関する研究（東大、林薫平氏）、地代の減免慣行を契約論にもとづいて考察した研究（東大、有本寛氏）、CGE モデルを使って農地開墾と植林のインド経済に及ぼす影響を検討した研究（東大、川崎賢太郎氏）、CGE モデルを使って貿易自由化と地方分権のインドネシア経済に及ぼす影響を検討した研究（筑波大学、徳永澄憲氏）。報告要旨が TEA 会のホームページ（<http://muses.muses.tottori-u.ac.jp/dept/E/wfarm/matsudat/TEA.html>）に掲載されている。今回の報告者のうち 4 名が 20 代であることが示すように、TEA 会は若手中心の研究会である。会員 2 名の推薦があれば、（若ければ）誰でも入会することができる。なお、本年の秋季大会は当研究所で開催予定である。積極的な参加をお願いしたい。